

(3) 小麦の歴史

－昭和後半時代～良質・多収・安定生産へ－

昭和37年（1962）、日本ではじめて自走式コンバインが芽室町の北海道農業機械化実験集落に導入され、小麦の機械化栽培の有利性が実証されました。労働生産性がてん菜の4倍、馬鈴しょの10倍というのです。これが今日見られる大規模小麦栽培による生産・流通システムの基礎となりました。最初のカントリーエレベーターは、昭和39年（1964）清里町に建てられ、このときタイミング良く春まき小麦「ハルヒカリ」が育成されたのですが、サイロに入ったのは「ホクエイ」でした。

昭和41年（1966）から昭和50年（1975）の10年間は、全道1万haの作付面積で、平均単収235kg/10a、変異係数31%と低収・不安定でした。その原因は、冬枯れと穂発芽です。それでもその前の10年より23%も増収しています。小麦の面積が減り続け、昭和47年（1972）には7,700ha、2万tと最低の生産となり、日本小麦の”安楽死”といわれた時代でした。

自給率ゼロになることを怖れた政府は、昭和49年（1974）に国内産小麦の振興対策を行い、麦価の米価に対する比率が45%だったものを、一挙に58%に引き上げました。

また、従来から麦対策事業並びに水田利用再編対策が同時に進められ、栽培機械や共同乾燥施設が導入されました。これによって稲作転換小麦4万haもことごとく機械化され、集団栽培が大きく進められました。このような生産の拡大により、昭和54年（1979）と昭和57年（1982）に相次いで十勝港と網走港に船積みセンター（ターミナル・エレベーター）が建設され、ほとんどがバラ貯蔵、バラ輸送になったのです。

「ホロシリコムギ」は、昭和56年（1981）に8万7千haと普及し、はじめて全国作付第1位となりました。それまで首位を続けてきた「農林61号」は、めん適性の上からも国内産小麦の標準とされていたので、いやでも「ホロシリコムギ」がこれと比べられ、従来からの低アミロ問題と合わせて、めんには不適と非難されました。このとき、生産者の皆さんは、小麦1俵につき50円を拠出して、実験室、温室、機械器具等を北見農試に整備し、

小麦の育種を著しく強化してくれました。育種目標をこれまでの準硬質から、中間質のめん用小麦への切り替え、忽ちにして「チホクコムギ」を。しばらくして「タイセツコムギ」が育成されました。「農林61号」よりめん適性の優れた「チホクコムギ」が広く出回ってから、北海道小麦の名声が著しく高まりました。

昭和63年（1988）は、12万9千haの作付で、収穫量53万tとこれまでの最高でした。とくに網走管内は、平均単収548kg、4町（美幌町、女満別町、小清水町、訓子府町）で600kgを超える収量を記録しました。なかでも最高収量は小清水町で、作付面積2,360ha、平均10a当たり単収は634kg（食糧事務所の検査収量は651kg）と驚異的な収量でした。

北見農試でも、単収1tを超える育成系統が輩出し、最高は1,145kgに達しました。昭和45年（1970）から平成2年（1990）までの20年間の増収率は、1.7倍、イギリスもまた1.7倍、西欧並の収量水準が夢でなくなりました。網走管内の平均単収について、品種との関係を見ますと、「ホクエイ」の時代は10年で230kg、「ムカコムギ」の10年で300kg、「ホロシリコムギ」10年で400kg、「チホクコムギ」5年で470kgで、増収率はそれぞれ1.3、1.7、2.0倍です。

大ざっぱに見れば、増収率の半分は品種の遺伝的効果、残り半分は土壤改良、施肥改善、病害虫防除、及び栽培技術の総合的効果と考えられます。ここで特記したいのは、窒素施肥の改善による収量向上と、蛋白の制御、栽培法と薬剤防除による冬枯れ対策、連作土壤病害の生態と防除、雨害対策としてのモーア刈り、地干し、コンバイン体系、高水分小麦の乾燥方法等の新技術の開発があります。

ところが、最近の5か年は網走管内が連続穂発芽で300kg、明らかに「チホクコムギ」のマイナス効果です。十勝管内は「ホクシン」効果で9、10年（1997・1998）と500kgを超えましたが、5年のうち2年は穂発芽です。これまでの多収化への道程は、「チホクコムギ」、「ホクシン」と加速され、さらに優れためん適性が備わって、北海道小麦が名実ともに、日本の小麦を代表するにふさわしくなりました。しかるに、収穫期の気象条件が厳しいとはいいながら、穂発芽に弱いがために、規格外、低アミロ小麦を頻発させていま

す。本年度の新品種候補「北見72号」の耐穂発芽が、どこまで懸案問題の解決に迫りえますか？ 育種家諸賢の一層の奮励によって、新しい小麦の歴史を切り開いていただきたいものです。

<長内 俊一>